

生活環境における望ましさの要因構造に関する研究

峰元 良太

近年では望ましい生活環境の形成が求められ、景観整備や社会資本整備の取り組みは多くなっている。ただし、生活環境の望ましさを規定する要因は多種多様であり、それらが複雑に関連しあって、望ましいかどうかの判断がなされるものと考えられる。望ましい生活環境を目指すなら、この複雑な関連性を明らかにしなければならない。よって本研究では、生活環境における望ましさの構成要因が、どのように関連しあっているのかを表現するため、望ましさの要因構造モデルを求めた。そのために、以下に述べる実験やデータの分析を行った。

まず、実験で用いる映像・音声刺激 20 種類を採取した。本研究では生活環境の刺激を、中堅都市の駅を中心として、半径 1 キロ圏内(徒歩圏内)にある、人の利用が多い場所から採取した。

次に、評価グリッド法を用いて、実験参加者から生活環境の望ましさを規定する評価語を抽出した。なお、評価グリッド法は通常「望ましい」環境であるための条件とは何か」という聞き方で行われる。しかし、本研究では「望ましくない」環境であるための条件とは何か」という聞き方で行い、環境の望ましくないところに目を向けた手法を取った。具体的には以下の手順をたどった。まず、防音室で 20 種類の映像・音声刺激を実験参加者に呈示した。その後、各自の生活環境に対する望ましさを基準に、20 種類の刺激を 5 つの群に振り分けさせた。次に、各群に含まれる刺激を、それよりも上位の群(より望ましいと感じた群)に含まれる刺激と比較させ、その群の刺激をより望ましくないと判断した理由を実験参加者の言葉で表現させた。次にラダーリングを行い、先ほど得られた評価語と因果関係にある言葉も評価語として抽出した。その結果、出現頻度が高かった評価語に「望ましくない」という語を加えて、17 種類の評価語を採用した。さらに評価語どうしを因果関係で繋ぎ、望ましさの要因構造の概念図を作成した。

次に、概念図にある 17 の各評価語をもとに、5 段階の SD 尺度を作成した。そして、評価グリッド法の実験と同一の刺激を実験参加者に呈示し、それぞれの刺激を SD 尺度上で評価させた。得られた尺度値を用いてグラフィカルモデリングを行い、連鎖独立グラフを得た。この連鎖独立グラフを初期モデルとして、共分散構造分析(パス解析)を行った。得られたパスモデルの適合度を改善するために、変数の因果関係を再検討してモデルの修正を行った。最終的に、適合度の高いパスモデルを得た。

パスモデルにある、第 1 変数群の変数から第 2、第 3 変数群を経て、第 4 変数群の「望ましい」へと順番に繋がる過程(間接効果)について考察をした。全部で 9 通りの経路がみられたが、全ての経路が「気分が上がる」に収束していた。ここから、単調な日々の中で一時の特別な感じが得られる気分の高まりは、生活環境の望ましさの重要な要素だと考えられる。また、9 通りの経路の内、間接効果の高い上位 5 位までの経路が全て「温かみがある」に収束していた。ここから、人工物が無く、温かみが感じられることは、生活環境の望ましさの重要な要素だと考えられる。また 6 位以下の経路は全て「安全である」に収束していた。ここから、身の安全が保障されていることは生活環境の望ましさの重要な要素だと考えられる。ただし、安全を保障するには環境の整備が必要であるが、それは人工物を増やすことになり、温かみの無い環境にしてしまう。したがって、安全面を確保しつつ、温かみを損なわないよう人工物の量を調整することが重要だと考えられる。

本研究では、これらを含む 11 の要因がどのような関連をもって望ましい生活環境となるのかを、パスモデルをもって示すことができた。ただし、パスモデルのいくつかの変数間には、本研究では想定できなかった変数が存在する可能性があるため、その点について今後検討する必要があるだろう。(環境行動学)